Y31a 国立天文台アーカイブ室の活動 (2)：国の重要文化財に指定されたレプソルド子午儀

○中桐 正夫, 渡部 潤一, 大島 紀夫, 佐々木 五郎, 縣 秀彦 (国立天文台)

レプソルド子午儀（口径 13.5cm、焦点 距離 217cm）は 1880 年 にドイツ・ハンブルグで製作され、1881 年に当時の海軍省観象台が購入して、海軍省 観象台のあった麻布区飯倉狸穴に設置されたものである。1888 年に東京大学天象台、海軍観象台、内務省地理局の 3 者が統合され東京大学東京天文台が設置され、レプソルド 子午儀は東京天文台に移管され、日本の時刻の決定、経度決定などに使用された。大正 3 年から東京天文台の三鷹への移転の工事が始まっていたが、移転工事が遅々としていた中、1923 年 9 月 1 日の関東大震災でメルツ・レプソルド子午環は転落して大破したが、このレプソルド子午儀は望遠鏡が吊られた構造の支持機構のためか、あるいは移転のため架台から降ろされていたためか無事であった。三鷹に移転された後、レプソルド子午儀は赤道帯恒星、黄道帯恒星等の観測に使われ、それらの星表が出版されている。これらの観測が終了した 1959 年代で役目を終え、長い眠りについていた。

三鷹構内の見学ゾーンの整備の一環でレプソルド子午儀室を整理していく過程で、われわれは、この望遠鏡が、ほぼ原形をとどめたままで存在していることを発見し、その整備・復元を行い、申請の後、本年 2011 年度に指定された国の重要文化財 43 点の一つとなった。望遠鏡の重要文化財は、東京天文台から国立科学博物館に移管された 20cm トロートン望遠鏡に続いて 2 例目である。本講演では、この間の経緯について紹介する。